



目 次

信心の心得(上)	……………	本多日生
開目鈔講話(承前)	……………	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十一)	……………	河合陟明
教 歌	……………	長松清風
記 事	……………	
○本部圖報	○産報會記	○入帳報告

第四十七年 五月號

統 一

昭和十七年三月二十四日 第三號 郵便認可
 昭和十七年四月一日發行 第一號 第一頁

第五百六十五號

第四十七年

四月號

昭和十七年三月二十四日 第三號 郵便認可
 昭和十七年四月一日發行 第一號 第一頁

第五百六十六號

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ諸妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラルル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

信心の心得 (上)

本 多 日 生

宗教は信心を基礎とするといふ點に於ては誰しも考へて居る事であるが、併しその信心といふことに就ての大切な心掛けは整頓して居ない人が多いのである。それが爲めにその信心の性質も正しく現はれて來ないし、又その信心の力も現はれて來ない、いろいろ信心の上の缺陷が除かれないのである。それ故に信心に就ての心得かたを常に注意して、信心の大切な所はどういふ點であるかといふことを忘れないやうに行かなければならない。唯だ簡単に信心々々と一口に言うて居るけれども、なか／＼それで事が判つて居る譯でないのである。そこで今日は信心に關する大切な點を四つ五つ數へて、その大體の心得を御話して見ようと思ふ。

一、信心の價值

さうすると信心に就て一番最初に考ふべき事は、信心の價值といふ事である。無論どんな宗教でも

信心が結構なものだと考へてその宗教の信仰に入つて來るのであるけれども、その信心の價値に就ての考へ方にいろ／＼と淺い深いがある。佛教に於て教へられて居る信心の意義に隨へば、信心ほど結構なものはないので、これは絶対的の價値をもつものである。それは吾々人間の心の働きに於て、いろ／＼の事を考へるものであるけれども、その中に於て一番大切なものは人間の眞心の働きのである。

その眞心の働きの最も清い意味によく整つて現はれて來るものを、これを信心と申して居るのである。それであるから信心が基礎になつていろ／＼の善きものが生れて來るので、信心は唯だ人間の心の働きの一つではない、心の働きの善きもの、全部を産み出すところの源である。即ち一切の善い事は信心に依つて啓かれて來るのである。それ故に佛教では「信は道の元、徳の母なり」と説かれて、一切の善い事の源が信心に依つて起つて來ると申してゐる譯である。であるから信は百行の本である。

あらゆる善い事の本である、信心を燒き盡せば一切の善い事の根本が成立たないことになる。即ち世間的の言葉で言へば、人間が眞心を失へば他の事は役に立たないといふことになる。明治天皇の軍人に賜はつた勅諭に「心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき」と仰せられて居る、それと同じやうに法華部の大薩遮經には、信心を失ふものは一切の善根の本を燒き盡すものであると説かれて居る。或は又優婆塞戒經には、信心なき者の善は直ぐに剝落ちてしまふ。丁度彩色の繪の具に膠が入つて居ないやうなものであつて、如何に美しく繪を描いてあつても

すぐに剝けて落ちてしまふのである。どうしても信を基礎として善を行ふのでなければ價値がないといふことを説かれて居る。又涅槃經にも、信を起し得ない人間は一番の悪人である。親を殺すよりも重い罪人であるといふことを力説せられて居る譯である。

それであるから人間の心の働きの中には、いろの善い事があるけれども、その中で信心が一番大切なのである。「信は寶藏の第一法」といつて、八萬も寶がある中で第一の寶が即ち信心であると言はれて居る。それ故に人間が命に代へても護らなければならぬものが信心である。「その信心を捨てざれば汝の生命を斷たん」と言はれた時にも、「宜しい、命は斷たれてもこの信心ばかりは捨てられない」と絶叫してこれを護るのが、本當の信心の意味合ひである。

日本人はなか／＼眞面目な善い國民のやうであるけれども、兎角宗教信心のことを、一方に於ては頑迷固陋のやうな意味に考へ過ぎてしまつた、又それを調節する方の人は御座なりの「ナウ信心もカチ／＼になつてはいけない、信心も悪い事ではないけれどもまア／＼いゝ加減に……」といふやうなことを言つて居る。信心に凝り固まつて居る者は、まるで譯の判らぬ頑迷固陋なことを言ふ、それはその人の信心そのものが辯づいて居るから、それに熱心することが世の中に害毒を流すやうになるのである。然るにそれを緩和せんとする者は、こんどは「信心といふものはいゝ加減にやつて居れば宜いものだ、まア信心などはしてもしなくてもどつちでも宜い……」といふやうな事を言つて居るの

である。日本人の宗教に關する話と言つたら大體先づこの二通りしかない、丁度半身不隨の中風に罹つたやうな者と、グデンに亂酔した者とが寄り集つて居るやうな話が、所謂宗教問題といふことになる。

この點から言つたら日本國民は實に野蠻な、悲しむべき國民である、歐米諸國に於てはそんな事はない、宗教に就ては皆それ相當の考を持つて居つて、それに就て話し合ひをするのである。モット野蠻な國の人間でも宗教の問題に就てはモット眞面目である。どうして日本人の宗教に對する觀念がこんな風になつたか、これは神道の教が宗教として不完全であるのに、それを胡麻化さうといふやうな事があつたり、又儒教が宗教に對して變な考を持つて居つて、何でもいゝ加減にやつて居つたが宜からうといふやうな淺薄な倫理の影響も大いにあつた。又一方には坊さんが廣大なる佛教の片端を見て獨斷的の事を言つたりした爲にこんな風になつたので、即ち神道の不完全と、儒教の淺薄と、佛教の片端を見た坊さんと、それから日本民族の中でもだらしのない輩と、それ等が寄つてたかつて今日のやうな宗教觀といふものを拵へ上げたのであらうと思ふ。併し日本もだん／＼世界の舞臺に出て行くのであるから、苟くも昭和維新を唱へる今日に於ては、宗教に就てもモウ少し譯の判つた信心をしなければならぬと思ふのである。何時までも經つても宗教の本當の價値が判らぬなどといふ事は、文明國の人間として實に情けないこと、考へる。そこで本當に信心の價値といふものを考へると、今申すや

うに信心といふものは正しいものであり、大切なものであつて、人間の命よりも以上に重く考へて行かなければならぬものである。

その代りにその内容實質といふものは十分に吟味して今日一般に考へて居るやうなる不完全なる間違つたものであつてはならないのである。一番大切なものであるから一番能く吟味しなければならぬ。婦人の方が品物を買ふのでも、チョットした平生着の半襟を買ふとか、或は臺所で割烹衣を買ふといふのであれば、まアその邊の何處の店でも宜いから買つて來ようといふことになるけれども、併しモット良い帯を買ふとか、或は婦人の晴着を買ふといふことになれば、何處の店でも宜い、どんな品物でも宜いといふ譯にはいかない、やはり品質から模様から色合といふやうな事を能く研究して、これが一番能く自分に似合ふだらうといふので、それに決定するまでには可なり考慮を要する譯である。着物などといふ物は或る一時の期間を經過すれば要らなくなるものであるけれども、それだけの考慮は必要である。況してや信心といふものは、縦にしては現在自分がこの世に生きて居る間ばかりではない、息を引取つて永遠の生命に聯つて行く後までも、いつ／＼迄も自分の心に影響を持つものである、又これを横にして自分ばかりではない、子に及び孫に及び遂には親類縁者にも及び、更に大にしては國家社會にも影響を及ぼすもので、宗教の正邪といふものは實に大きな影響をもつものである。日本の今までの宗教論といふものは多くは皆ごまかし論である、學者がいろ／＼の事を言つて居

るが嘘の事が多い、宗教に對しては不謹慎な間に合せのごまかしを言つて居る。であるからその點では偉い學者だなどと言はれた人も、死んでから閻魔王の前に引据えられて、今頃は背中をどづかれて居るかも知れない。宗教といふものは普通の人が考へて居るよりもモツ大切なものである、女の人がお嫁に行く時着を買ふのでさへも相當の考慮を拂ふではないか、況んや永遠の生命にまで關係を持つ所の宗教の信念に對して、これを十分に選擇するといふ觀念の乏しいのは實に慨かましい事と言はなければならぬ。

さういふ風に考へて來ると信心の如何に依つてその人の人格がわかれて來るし、又その人のこの世に於ける仕事がわかれて來るし、それからその人の本當の幸福がそれに依つて定まつて來る譯である。さうして永遠の生命、生れかはり死にかはりして行くところの前途に對しても深き關係を持つて來るのである。又それが自分ばかりでなく、自分の産んで行く子供に影響するのであるから、非常に信心といふものは大切なもので、その一家の内在する如何なる大切なる品物よりも、自分自身の心の信心が一番大切なものだといふ事になるのである。

凡そこの天地宇宙に存在して居る一切の物よりも、自分の心が一番大切なものである。若し自分自身に心といふものがなければ、天地の間に在る物は、ナニも善い物とも悪い物とも言へないのである。世の中がまるツきり石や瓦ばかりであつても何とも感じないし、又それと反對にこの世の中がダイヤ

モンドで一パイになつて居つても、それに対する自分の魂といふものが無かつたならば何とも感ずるものではない、天地が金や銀で埋まつて居つても自分には何等の關係がない、自方の方に心といふものがあつて自他相關係するに於て初めて、花が咲いて居れば「あゝ綺麗だなア」と感じもするし、又塵芥があれば「あゝ汚いなア」といふことが分つて來るのである、こつちが空つぽであるならば、一切の事の善惡や物の美醜といふことの關係は起らない、自分に魂があつて初めて事物との關係が起るのであるから、その魂の働き具合の善い悪いといふ事が一番大きなことになつて行くのである。その善い考の根本を爲すものが、己の命よりも大切な正しき信念といふものである、これが人間に取つて一番大切なものである。

であるから如何にしてとも自分の正しき信念といふものを擁護し、この信念の發達を圖ることが、人間の正味の望みなのである。それより外に永遠の自分と共に存在するものは無い。先に言つた嫁入の着物の事でもさうである。タツタ一時しか役に立たない嫁入の着物でも、それを選ぶにはなかくの苦心を費すのである。又婦人が若いうちからそれこそ一生懸命に骨を折つて、年を老ると皺が寄つて來て思ふやうに白粉も延びないやうになつて行く。併しこれ等の老人にも若い時があつたのだからこのお婆さんが嫁に行く時分にはどんな顔をして居つたらうかと思つて、そのお婆さん達の若い頃の顔を想像して見た。今こそこんな皺だらけのとばけたやうな顔をして居るが、これでも若い時分には

花を欺く美人であつたやうに思はれる。又自分が神戸に行つた時に痛切に實感したことであるが、曾て自分の兄に嫁を貰ふといふて、その嫁の候補者であつた婦人がある、非常な美人であつて、當時家族の者もあれはなか／＼容貌のよい人だといふ評判をして居つた、自分は當時漸く十二三歳であつたから詳しい容貌は記憶しては居ないが、「綺麗な女だな」とは思つて居つた、それが何かの事情で結婚はしない事になつたのであるが、その人の名前は覚えて居つた。その婦人がこの間神戸で自分に會ひたいと言つて訪ねて来た、名前を聞いた時に「ハ、アあの人だな」と思つて、昔の綺麗な娘の頃の顔が頭に浮んで来た、所が其處へ出て来たのを見ると驚くほどの老婆である、モウ七十歳に近い、完全なお婆さんになつて居る、頭髮はスツカリ白髪になつて居るし、顔は委びて皺だらけになつて居る、あの花の如き美人が斯うもお婆さんになつたかと思ふと、實に人生の移り變りに自分は驚いた。

さういふ事は今更自分が驚くまでもなく、佛様が屢々お説きになつて居る事である。人生の有爲轉變の速かなる花の移り變る有様に譬へて「色にはほへど散りぬるを我が世誰ぞ當ならむ」といふは歌にも唄はれて居るが、實際考へるとその變化は速かなものである。まア若い間はさういふ事を楽しんで行くのも人生だから宜しいけれども、相當の年輩になつて落着いて考へて見ると、今まで人生の幸福と思つて居つた事柄は悉く振捨てられてしまつて、最後に残るものは自分の魂だけである。その魂の行末を考へて行く時、其處に今まで爲して来た事の善惡に依つて一つの交換札といふものが出来

てそれに依つて佛に成ることも出来るし、又ゲジ／＼になることもある。その時になつて吃驚して、これは飛んだ事になつた、こんな事ならモツと信心をして置くのであつたと後悔しても追つかないのであるから、これはどうしても或る程度に於て宗教の信念に入り、一種の人生觀といふものを打ち立てなければ信心の尊さに繋がることは出来ない。

信心が尊いといふのは、他のものが有爲轉變して皆消えて灰になつてしまふ時に、宗教を信じた者のみが永遠の光明を保ち得るものであることを決定して置かなければならぬ。誰も彼も死んだら火葬場に送られてしまふ、火葬場までは懇意な親類や友達を送つて呉れるけれども、その人達は「こんな所に長く居つても仕様がなから、日が暮れない内に早く歸らう」と言つて直ぐに歸つてしまふ、さうしてタツタ一人きりであの重い扉の中の釜に抛り込まれてしまふ。さうなつてから以後といふものは、夫婦の間でもどうにも仕様がなから、女房の遺骸を火葬場に送つて歸つて来た亭主は「あ、モウ彼女も火をかぶつて今頃は灰になつてしまつたか、可哀さうに……、あゝ氣持が悪い、一パイ潤けて呉れ」といふやうな事になつて、酒でも飲んで氣を紛らして、もう死んだ女房の事は成べく考へまいといふことになつてしまふ。その時に平生自分が信心をして居つたならば、宗教の方に於て護つて下さる佛様のみは、その總ての者が去つた時に「あゝお前は可愛い者だ」といつて抱き取つて下さるのであるから、どうしても信心は大切である。又人生は永遠に亡びないものである、そこが宗教の生命である。その時に本當に涙を流して有難く感ずるのである。人間といふものは其處に及んだ時に本當の

喜びが現はれて来るのであるから、信心に進んで行く場合には何時でもその事を考へて置かなければならない。さういふ風に考へることは決して厭世観ではない。今申すやうに花を欺く娘もやがてはお婆さんになるし、どんなお婆さんでもやはり美しい娘の時代があつたに相違ない。だからどうしてもそこに一種の人生觀を打ち立て、他のものは變遷常なきものであるけれども、信心のみは何處までもその價值が續いて行つて、自分の一生涯用ひて盡きないのみでなく、死後永遠の力となるものであるといふことを確しかりと心得て置かなければならぬ。その意味に於て信仰の價值は全宇宙に於て何物よりも尊いものである。

その信心の効果が何に現はれて来るかといふと、現在に於ては宗教的信仰の生活を開いて來て安心立命を得られ、死後に於てはその信心が先程言つた引換券になつて自分の佛性が顯はれて來る。自身自身の信心の開發に依つて常樂我淨の佛身を得るのである。それを得てしまへば永遠の幸福は自分を離れないのである、その開發を忘れてはいけない。順序よく行つた者は臨終を期して永遠の悟りに就くことが出来るけれども、その時になつて「あっしまつた、この間までは持つて居つたけれどもつい氣を許して落してしまつた」「それではあなたは駄目です」と言はれたらモウ永遠の沈淪、永遠の後悔である。だから同じやうに信心をして來てもウツカリしては駄目である、それは何も難かしいことではない、人間が眞面目にして居れば信心は何時でも起る、信心が大切であると思へば其處に信心の力が起つて來る。どこまでも信を以て第一と爲すといふ心懸が大切である。(次續)

開目鈔講話

(承前)

小林一郎

さういふ譯でありますので、日蓮上人も、この世に於て法華經を弘めるといふやうな大きなはたらきをする、さうしていろ／＼な迫害に遭ふのも、これに依つて前の惡業を償ふのだ、さうして今、この世に於て教を弘めるといふこの善きはたらきをするのだから、これに依つて大勢の人を教へ導くことが出来るのだ。この報いで未來に於て、今の自分は凡夫だけれども、後に至れば菩薩の境界にも近づくだらう、佛にも成るだらうといふことを信じて居られるのであります。今の吾々は凡夫だから、なか／＼礙な事は出来ないけれども、さういふ心持を持つて自分を勵まして行けば宜しい譯であります。

それは併し現世に軽く受ける方であつて、この人間の五十年、六十年の間はどんなに貧乏しても多寡が知れて

居る、どんなに人に馬鹿にされても多寡が知れて居る。この處で、この五十年か六十年で過去の罪を償ふことが出来るといふのは、それは護法の功德力に由る。この世に於て冤に角教を有難いと思つて、教を世に弘めることに力を盡したお蔭で、過去の罪を此處で償ふことが出来るのだ。だからこの世で苦しい事に遭ふ時に、有難いと思つて、アア自分は信心をして居るから、この世でこの位な苦しい思ひで過去の罪を償ふことが出来るのだと思へば、心から有難い、斯ういふ事を言つて居られるのであります。それはこの開目鈔をお書きになつて間もなく佐渡でお書きになつた「佐渡御書」の中に、面白い譬を取つて居らっしゃる。譬へばこの小石川區なら小石川區に住んで居る者が、近所の米屋酒屋に借金をして居る。と

ころがなか／＼商人は催促しない、晦日まで待つて呉れと言へば待つて呉れる。佛し一家を擧げて大阪へでも行くといふことになれば、行かれてしまつてはモウ取れないから商人が皆催促して来る。それと同じ事だ、人間が凡夫で居る間は過去の罪の償ひをしなくても宜いけれども、凡夫の境界を離れて佛にも成り菩薩にもなるといふことになれば、ちやうど東京から大阪へ行くやうなもので、一通り勘定してしまはなければ、凡夫の境界を脱けられはしない。そこで信心をすればいろ／＼な迫害が来るといふのは、ちやうど引越をして他へ行くやうなものだから、一遍總勘定しなければならぬ。斯ういふ事を言つて居られるのでありますが、洵にどうも適切な譬であります。考へて見ると實際さうであります。吾々凡夫の境界を離れる爲には、スツカリ勘定しなければこの境界を離れることは出来ない。いつまでも凡夫で居るのなら言ひ譯をすれば拂ひは後へ延ばせるのであります。併し凡夫のこの境界を離れてしまつて、佛とか菩薩とかいふやうな境界へ行かうと思つたら、スツカリ勘定しなければ離れることは出来ない。斯ういふ事を佐渡御書の中に

言つて居らつしやるのでありますが、洵に適切な譬であります。吾々は正しい教を世の中に弘めることに聊かなりとも力を盡して、さうして苦しい目に遭ふならば今の總勘定をするのです。凡夫といふ所を越してしまつて、菩薩とか佛とかいふ所に轉居するのであるから、スツカリ勘定しなければならぬ。拂ひを皆済ませなければならぬ。斯ういふ心持で有ゆる迫害を耐へて行けば宜しい譯であります。斯ういふ事を日蓮上人は説明して居らつしやるのであります。洵に適切なことに思ひます。

此經文日蓮が身に宛も符契の如し、狐疑の水とけぬ。千萬の難も由なし、一々の句を我身にあわせん。或被輕易等云云。法華經に云、輕賤憎嫉等云云。二十餘年が間輕慢せらる。或は形狀醜陋。又云、衣服不足は予が身なり。飲食麤疎は予が身也。求財不利は予が身也。生貧賤家は予が身也。或遭王難等、此經文疑ふべしや。法華經に云、數々擯出せられむ。此經文に云、種々等云云。

その涅槃經の言葉が、日蓮上人御自分の身にちやうど「符契の如し」刻符を合はせるやうに少しも違はずに現れて来た。斯う言はれる。だから「狐疑の水とけぬ」何も疑ひはない、これ程善い事をして何故ひどい目に遭ふのだらうか。そんな疑ひを起す必要はない。これ程ひどい目に遭ふのは過去の罪を皆償ふ途だ。斯う思へばナニモ疑ひを起すには及ばぬ。「千萬の難も由なし、一々の句を我身にあわせん」ナニどんな苦しい目に遭つたつてそんなことぐらゐで負けて堪まるものか。一々の言葉を皆自分の身に引き合はせて、償ふするとあるから、その通り貧乏して過去の罪を償ふのだ、斯う思へば宜い。或は醜く生れると書いてあるから、人から醜い奴だと言はれてもお経の通りだと思へば宜い。罵られると經典にあるから、自分が罵られてもお経の通りだと思へば宜いのであつて、一々に自分の身に引き比べて、一つ一つの事が皆過去の罪を償ふ本だとスツカリ確信しなへすればどんな中でも平氣で通れる。斯う言はれるのであります。

「或は輕易せられる」とある、その通りだ。法華經の中

にも「輕賤憎嫉」とある。法華經を弘める者を輕んじたり侮つたり、憎んだりする者があるとある。日蓮がその通りで、二十年の間皆に侮られて、皆に賤しめられて、ひどい目に遭つて居る、お経の通りだ。今更驚くことはない。お経の中にある通りを今自分が経験して居るのだ。或は委も醜くくて着物も足らないとあるが、日蓮がその通りである。ここ數年の間着物も足らなくて、寒い思ひ物も疎なもの食べられないとあるが、日蓮もその通りである。自分もこの數年間疎なもの食べたことはい。又「財を求め利あらず」金が無くして貧乏して居るとあるが、その通りで、自分も永い間貧乏して居る。又貧賤の家に生れるとあるが、自分もその通りで、安房の漁師の子に生れて洵に貧賤の生活をして居る。或は「王難等に遭ふ」政治家の迫害に遭つて刑罰に處せられるとあるがその通りで、日蓮も何度も伊豆に流されたり、佐渡に流されたりして居る。又法華經の勸持品の中には數々擯出せられるとある、一度ならず二度も三度も自分の住んで居る所を遣はれるとあるが、日蓮もその通りで、前

に伊豆に流されたが、今度は佐渡に流されて、数々追はれるといふこの言葉も自分の身に現はれて居る。

斯由護法功德力故等とは、摩訶止觀の第五に云、散善微弱なるは動ぜしむること能はず。今止觀を修して健病虧されば生死の輪を動ず等云云。又云、三障四魔紛然として競ひ起る等云云。

そこで斯ういふ事をいろ／＼経験して苦しみに遭ふのはこれは涅槃經の「新れ護法の功德力に由る」で、佛の教を世に弘めることに骨折つて居るから、その骨折つたお蔭で過去の罪を皆この世で償つてしまふのだ。斯う思ふと、有ゆる苦しみに遭ふことが却て喜びの本になる。

そこで天台大師のお書きになつた摩訶止觀の第五の中にはさういふ事がある「散善微弱なるは動ぜしむること能はず。今止觀を修して健病虧されば生死の輪を動ず」散善といふのはほんやりした心持を以て善い事をして居ることでありませう。人間は自分で氣が附かないで善い事をして居る者がある。けれどもそれは自分が善い事と思

はないでやつて居ることといふものは多寡が知れたものであります。そのくらゐな、自分の氣の附かない間に何か世の中の役に立つくらゐな程度で居れば、そんなに恐しい出来事は自分の身に起つて来ない。ところが天台大師が摩訶止觀の中に説いて居るやうに、この法華經の信仰といふものを眞面目に續けるといふことになる。「健病虧す」これは短い言葉ですが非常に善い言葉です。壯健な時でも病氣の時でも信心が變らない。これが大事であります。壯健だとか病氣だとかいふのは自分の身のことではない、自分の境遇であります。幸福な時でも不幸な時でも、得意の時でも失意の時でも同じ信仰を有つて居るといふのでなければ、本當の信仰ではない。景氣の好い時にはマア信心するけれども、景氣が悪くなつた時にはやめてしまへといふのでは、本當の信仰ではない。「健病虧す」といふのは非常に良い言葉であります。又人に依ると子供が死んだ、女房が死んだといふ時だけ題目を唱へて、二三箇月経つとケロリと忘れてしまふ人がある。それも困つたことです。どんな境遇でも、幸福な境遇でも不幸な境遇でも、人間が人間としてある以上は

正しい信仰の上に立たなければならぬ。「健病虧す」苦しい時でも楽しい時でも同じ信仰を持續けて行くといふと「生死の輪を動ず」生きる死ぬといふ人生のいろ／＼の變化が起つて来るといふ。或は迫害を受けることもあるし、或は比較的安全なこともあるし、いろ／＼な事が起つて来る。それで初めて人間が前の世から爲し來つた一切の罪を償ふことが出来るのだから、そこはモウしつかり覺悟しなければならぬ。

又同じく摩訶止觀の中に「三障四魔紛然として競ひ起る」とある。三障四魔といふのは幾度も申しましたから略しますが、要するに様々な障りです。様々な障りが紛然として競ひ起る、一つちや済まない、紛然として競ひ起るといふことはお互に能く考へなければならぬ。人間は悪い事が一つでは決して済みませぬ。電車から落ちるといふと墓口を落とすとか、時計を無くすといふやうなことがキツと出来て来る。ぬかるみがあつてはねを上げると帽子を落とすとか羽織を汚すとか何かあつて、悪い事といふものは一つでは済まない。人生は妙なものであります。そこで大概の人は參つてしまふ。一つなら我慢が出

来るけれども、一つ何か悪い事があると、それに續いてそれが縁になつて又悲しい事が出来て来、又苦しい事が出来て来て、二つも三つも四つも来るとスツカリ腰を抜かしてしまふ。それだから紛然と競ひ起るといふことは能く覺えて居なければならぬ。何か悪い事が一つあると二つ三つ四つとキツとある、何か一つ災難があつたら、後から／＼災難がキツと来る。これは自然の成り行きだから仕方がない。そこで一つ災難が來たら、それを踏み越えて行くから、二つ來たら二つ、三つ來たら三つ踏み越えて行かうといふ、これだけの覺悟を有たなければいかぬ。

私は何も自分は解つて居りませぬけれども、よくこの統一會館に見えられる矢野茂さんといふ方があります。が、先年、年頃の娘さんを亡くして悲しんで居られたから私は言つた。海に御愁傷様で、どうも何とも申上げやうもないが、人生の苦しい事といふものは後へ續くものだから、今この際は我慢が出来たらうが、又これに續いて不幸な事が起つた時に腰を抜かすやうなことがあつたら、折角法華經を讀んだ甲斐がないのだから、私は大

變悪い事を言ふやうだけれどもしつかりしなさい。不幸はこれだけで止まると思はないで、後まで續くから踏張りなさい」と言つた。洵にどうも亂暴な事を言ふやうですが、さう言つた。さうすると次の年奥さんを亡くされた。矢野さんが私の手を執つて「君の言うて呉れたことが今日日本當に身に沁みたま」と言はれたことがありますが實際私はさうだと思ふ。一つなら我慢が出来るが、二つ目には我慢が出来ない、三つ目は尚ほ我慢が出来ない。ところが人生の事といふものはなか／＼後から／＼續いて来るものだから、三魔四魔紛然として鼓ひ起る。どんな障りが来てもこの障りに耐へることに依つて自分の一切の罪を償ふといふ、しつかりした覺悟を有つて居なければならぬ。これはなか／＼世の中を通つて見ると單純には行かないでせう。

それで日蓮上人はさういふ事を覺悟して居られる、どんな災難が来ても「豫て存じの旨なり」前から轉つて居る、又後から苦しい事が来ると思つて待つて居た。来たらずれまでだ、斯ういふ事を言はれて居るのであります。斯くして有ゆる艱苦に耐へて功德を積み、自分の心を鍛

を熱に甚鍛はざれば、きず隠れて見えす度々せむればさす顯る。麻子をしばるに強くせめざれば油少さが如し。今日蓮強盛に國土の誘法を責れば、此大難の來るは過去の重罪の今生の護法に招き出せるなるべし。鐵は火に値はざれば黒し、火と合ひぬれば赤し。木をもつて急流をかけば、波山の如し、睡れる師子に手をつくれれば、大に吼ゆ。

日蓮は今法華經を弘めて、北條執權から迫害を受けて居るけれども、自分は前の世にこの通りやつて居つたかも知れぬ。自分が悪い王様であつて、法華經を弘める者の如く奪つたり、田を奪つたり、迫害を加へて居たかも知れぬ。斯う思ふと今の自分が迫害を加へられるといふことは何ともない。前に自分がやつた通りをやられて居るのだから何ともない。斯ういふ心持が起きて来るのであります。

ちやうど當時の日本の大勢の人が法華經の寺を倒すや

へ、又前の世からの一切の罪を償ふといふことでありまして、初めて本當の信仰の甲斐がある譯でありませう。お互の身の上に嫌な事がなければこれほど結構なことはありませぬけれども、兎に角人生の苦しみといふものは一つで済まぬものでありますから、紛然と鼓ひ起る、後から續いて出て来るのだといふことを覺悟しなければならぬ。さうあつて初めて本當の信仰といふものが買いて行ける譯であります。

我無始よりこのかた、惡王と生れて法華經の行者の衣食田畠等を奪ひどりせしこと數しらす。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒す如し。又法華經の行者の頸を刎じること其數をしらす。此等の重罪果せるもあり未だ果さざるもあるらん。果すも餘殘未だつきす。生死を離るゝ時は、必ず此重罪を消し果て、出離すべし。功德は淺輕也。此等の罪は深重也。權經を行ぜしには、此重罪未だをこらす。鐵

うに、自分も前の世に於ては法華經の行者を迫害して、頭を斬るといふやうな事をやつたかも知れぬ。さういふ重い罪を犯したのをなか／＼償ふことが出来ないで、今日に及んだのであらうから、どうも今この世に於て法華經を弘める爲に迫害に遭ふといふことも已むを得ない。又少しは善い事をして、前に犯した罪を償ひ切れないで残つて居るといふやうなこともあるだらうから、それは自分が權經、即ち方便の教ぐらゐを信じて居た時には却つて無事だつたけれども、今法華經といふ眞實の教を信じて世の中に弘めるといふ時になると、愈々以前の罪をこの世で償はなければならぬといふことになるから、却て善い教を弘めることに依つて迫害が多くなる。これは前に申した轉重輕受で、前の世の罪が後の世までは残らない。それであるから善い事をするに却つて目の前の禍ひが多くなつて来る。これはちやうど譬へて見れば鐵を鍛へるのに、なまぬるい火で鍛へて居ると取理が隠れて判らないけれども、強い火に入れて見るとその取理が判ると同じことだ。自分が今眞面目になつて居るから、自分が本當に正しい信仰を隠んで居るから、それで

前の世の罪が現れて、さうして苦しい目を受けて居る。この苦しい目を受けることに依つて一切の罪を償ふことが出来るのだ。斯う思ふと今苦しい目に遭つて居るといふことが洵に有難く思はれる。

又麻の實を絞るのでも、強く押へないと油が出ないと同じやうに、日蓮も世の中で教を弘めて非常な迫害に遭つて来ないと、大きな功德を積むことは出来ない。又自分の信心といふものもしつかりしない。それで今日蓮も強盛に、日本の國が法華經に背いて居るといふことを責めるから、その爲にいろ／＼な難に遭ふ。この難に遭ふことに依つて過去の重い罪を皆此處で償ふことが出来るのである。實にどうも有難いことである。

鐵は火に値はなければ黒い、火と合へば赤い。木を以て流れの急な所に入れて水を堰くと堰かれて一層流れが強くなると同じやうに、一生懸命に正しい教を世に弘めれば必ず迫害が来る、必ずいろ／＼な出来事が起る。その出来事を耐へることに依つて教が弘まるのだし、又自分も一切の罪を償ふことが出来るのだから、洵にこれは有難いことである。

迫害を加へたのだから、迫害を加へたといふことは、議論に於ては日蓮に負けたと彼等が告白して居ると同じであります。それを言つて居るのであります、日蓮に對抗して議論が出来たら、ナニモ島流しにしたり頸を斬ることしないで議論をする筈であるが、議論では勝てないから、仕様ことなしに、頸を斬らうとしたり、島流しにしたといふことは、日蓮の主張が正しい、他の者の言ふことを負かすだけの力があるといふ證據だ。だから睡れる師子に手を附けると師子が吼えたと同じだ、確にこれは萬難があるのだ。斯う考へれば迫害を受けるといふことが少しも悲しい事でもなければ、苦しい事でもない。自分の主張が正しいといふことの證據になると言はれてこれは前に申したやうに日蓮の弟子檀那に讀ませる爲の舞書でありますから、お前達もしつかり考へる、日蓮に迫害が来るといふことは、諸宗の僧侶が日蓮と太刀討が出来ないといふ證據だ。日蓮がつまらない者だつたら、皆が集まつて来て議論をして負かしてしまふだらうけれども、それが出来ないからこんな目に遭はせるのだ。さうして見れば日蓮の主張は正しいといふことが解つて居

斯ういふやうに考へて、自分はこの世の中に立つて十九年二十年の間正しい教を弘め、さうして迫害に遭ふといふことを喜びとする。若し日蓮の言ふ事が、てんで誰も相手にすることの出来ないやうなつまらないことだつたら、迫害は来ないだらう。何を言つても人が相手にしなければ迫害はさう加へないが、迫害を加へるといふのは、日蓮の言ふことが相手の膽に應へるから、迫害を加へる。何だか馬鹿な事を言つて居るナと思ふと捨てて置く。どうも彼奴は今の内に處めて置かないと大變なことになると思ふから、諸宗の者が餘計迫害を加へるのである。迫害を加へるといふことは、自分の言ふ事が皆の膽に應へるやうな強い主張であるいふことの證據になる。ちやうど睡つて居る師子に手を附けると師子が吼えたと同じ事だ。迫害が来ると自分の主張が力強いといふことの證據になる。斯ういふ事を言つて居られるのであります。

それは確にさうであります。當時の鎌倉に於て、日蓮を向ふに廻して議論して勝てる氣遣ひはない。だから仕様がなから北條執權に取入つて、北條執權の力で以て居る。それを今迫害が来たからと言つて腰を抜かしてしまふといふことではならないぞ、斯う言はれて皆を驚かし居らつしやるのであります、ただ數氣よく偉い事を言つて居るのではない。さういふ事を考へて見ると實に面白い、成程その通りであります。若し鎌倉の良觀なり道隆なりが日蓮を負かすことが出来たら、ナニモ島流しにしないで宜い、松葉ヶ谷の庵室に行つて談判して手を突いて譲らしてしまへばそれきりであります。それが出来ないから迫害を加へる。迫害を加へるといふことは議論に於ては負けてしまつたといふことの證據であります。斯ういふ事を考へて見ると、日蓮上人の弟子檀那たる者は大に意を強ふることが出来る譯であります。

(第四十三講了)

本佛實在の宗教哲學(十一)

河合 陟 明

十、本有體系の教系(承前)

天台獨歩の妙觀たる一念三千とはいかなるものであるか。その組織と意義とに關しては、さらに後に論明せねばならぬ。而して天台教觀の原則として、一念三千の成立根據たる三諦論は、さらにこれをその源、慧思、慧文の二導師を経て、遙かに遠く、高祖師龍樹の中論および大智度論における

因緣所生法、我説即空、亦名爲假名、亦名中道義、

ないし三智一心中得等の諸文より發得してきたつて、これをさらに獨創的思惟プラス實踐體系に綜合的構成していつたものである。而して龍樹はこれはいはゆる第二の佛陀ともいふべきものとして、すなはち大乘佛教の興起者として、すでに夙にこの中道實相の妙觀を唱へ、僧叡のいはゆる窮理盡性明三萬行なる法性融通の照法輪としての智度無極・明度無極、以て佛法の大海を渡るべき、無等々の明究たる、開覺自性の般若の妙慧を明かにした人である。而してこれはさらにその源、根本佛教における本師釋尊の金口の法輪たり一代の行化たる、すなはち二邊を超えて巍々堂々として卓立する、中道一實の正慧正行の思想と態度を繼承し發揚したものである。

こゝにおいて予は、この佛祖の大精神がまさしく生死一大事の血脈として、一系連綿として傳はりきたれる、龍樹、天台・妙樂・傳教より日蓮聖人に至る中道思想に立ち、しかのみならず實に恩師聖應院本多日生上人の多年薰陶の賜と、さらに之に加ふるに同門の法友(とくに中村清一氏等)との切磋琢磨によりて啓發開悟したるところを結晶して、新たに本有體系を樹立し、その一本有を開いて、無作本有より無始本有に至る、すなはち眞如法性より本佛實在に至

るところの「大體系となし、以て眞理と人格との理事二極の實在を明かにせんとするは、これまた中道第一義諦を開いて空假二諦となす三諦實相論の哲學的根據より發して、そのとくに宗教建設論としての佛陀論的なる構成を説くものである。換言すれば、本有といふ新たな實在概念 *Realitätsbegriff* を以て、佛教における基底面より起頂に至る諸層を統一的に構成し、その演繹的發展を論じて本有概念の分析と綜合を明らかにし、さらにその論理的過程として、即ち本有體系の内面的なる自覺的展開を論ずるときは——かの天台が獨創的教理體系として、藏・通・別圓といふ四教の教理を構成し、以て四教無作の理圓にきたり、しかも未だつひに、事圓の極致たる本佛無始の人格實在を説き得ざりしに對して、眞に天台を完成する無作體系の發展として——「無作を有作化したる有始に即して無始を顯す」無作・有作・有始・無始といふ、カント的にいへばアンチノミイ的、ヘーゲル的にいへばダイアレクティク的なる同じく四段の一群の系列を展開するに至るのである。而してかゝる實在の形式的あるひは特に時間的規定ともいふべきものを、自覺的體系としていへば、理本覺・向覺・始覺・事本覺となり、又これを人格概念への到達過程としていへば、性・修・證・用の四段となるのである。またさらに後にしだいに論明するが如く、これを一層精細に演繹するときは、予はかの天台と妙樂との思想構成にならひかつこれらを攝取すると共に、また現代の思想界における哲學的潮流の諸問題にも反省して、據つて以てこゝに本有の實在の純粹形式と純粹内容と或は如是體と如是性との一體性一雙、特殊と普遍、あるひは限界と融通、あるひは主語と述語、または唯色と唯心との「色心一雙」、惑業苦の三道と涅槃の三徳、無明と法性、煩惱と佛性、あるひは性善性惡の、迷悟または「善惡一雙」、(以上は法性無作としての根本實在あるひは先驗原理門における三雙)またつぎに自覺と自然、あるひは自由と必然、または一念と因果としての「修性一雙」、また無明を破つて法性を顯す、破邪門と顯正門との、轉脱二門における能破と所破・能得と所得との關係、とくにこの二門については、いはゆる別教の破三權無作・顯實無作」と、圓教の即三權無作、證實無作(止觀十)また動如入如(別教)と共に不動如而是如(圓教)(文句一)なる、破惑證理の巧拙にヒントを得て、こゝにすなはち別教の但理隨緣なる緣修の有作門より、圓教の理圓性具なる眞修の無作門に進むところの、破惑における「能所一雙」と、證理における「權實一雙」とを立し(以上は修行無作としての實踐門における三雙)さらにまたいよ

佛果の證得に入つては、こゝにまづ期然として時間の鐵鎖を抜け出で、却つてこれを見、限下に俯視し、云く、

云何歸大處、法無始終、法無通塞、若知法界一法界無始終、無通塞、豁然大朗、無碍自在。(止一)

こゝにおいてかこの絕對の智的直觀に映じきたるところの對象界の實相は何ぞ、すなはち予のいはゆる絕對の統覺的認識なる佛果のノエシスに對するノエマは何ぞ、といはば、それはまづ自己みづからの過去無限の實相史でなければならぬ。換言すれば、無作の法性が自己そのものを個體人格として現實的具體化し、以て本有にしてしかも不有なる無明の不覺より無限の今有に無限に向覺したる、法性限定の行爲的發展過程としての、あるひは法性直觀の推論的體系化の發展より完結への作用的足跡としての、從迷至悟なる一實菩提への道程を進みきたりし乘如實道一來成正覺、故名如來、とこの自己自身の歴史でなければならぬ。換言すれば、無明緣起なる輪廻界にあつては、惑業煩惱の招集による集苦二諦の因果的積聚となるが、これに反し一念の自覺的向上による佛性緣起・法性緣起として、解脱界への因果を辿る道滅二諦の積聚としては、まさに有爲轉發・生死無常なる衆生の五蘊身より、常住不滅・大涅槃常樂我淨なる佛陀の五蘊身へ、佛性の質量限定・法性の内包量開發、すなはちいはゆる佛性の向覺・行善としての人格的内容積聚の經歷として、まさに天台のいふが如く、

觀釋者、王即心王、舍即五蘊、心王造此舍、若觀五陰即法性、法性即受想行識、一切衆生即是涅槃、不可復滅、畢竟空寂舍、如是涅槃、即是眞如實體、先立觀境、正當觀陰、又諸觀境、不出五陰、靈覺即智性了因、智慧莊嚴也、鷲即集緣因、福徳莊嚴也、山即法性正因、不動三法、名祕密藏、自住其中、亦用度人(文句二)

ないし廣く一般的にいへば、緣因の行爲も了因の智性も、すべて集集であり、開發であり、限定であり、決斷であり、具體的自覺の發展であり、亦即法性への還元でなければならぬ。一言にしていへばすなはち、我れといふ個佛統覺の過去無限なる因果的發展史を直觀的反省するのである。さらに同時にそのことは、必然に自己と他者との交渉の歴史として、自己のみならず全十法界無限の人格の無限の歴史をも、また一望のもとに直觀する、否、Nāgārjuna 追體驗し、Nāgārjuna 追體驗し、プラトニーのいはゆるイデアの Anamnese 記憶にも比すべく、オーガスチンのいはゆる偉大なる神の記憶の宮殿に參徹するにも比すべき、全法界歴史の實相を證得する——すなはち現在といひ過去といひ未來といふ如き時そのものに對して、これを自在に融通する。何となれば畢竟するにそれは、無作の法性の限

定作用の影にすぎない、すなはち法性自覺の足跡にすぎない、それが時である。もちろん時なくしては法性の全内容を限定し盡し、自覺し盡すことはできない、本有を今有にすることはできない。しかしその限定の極限、その限定の完了、すなはち一たび大自覺位への到達の上においては、すべてかゝる時空の足跡を絶して、いはゆる「佛法之奥區、窮神之妙境」たる滅影澄神の超時間的實在界に入る、一心法界なる大涅槃の眞如界に入る。そこにおいては時間も空間も一望のもとに眺めわたされる、無量無種なる有作今有は一大本有海中の千波萬浪にすぎない。現在といひ過去といふも、固然たる何物もなく、頑然たる何物もない、すべて融通無碍・自在無碍なるものである。まさにすなはち

約三觀教觀、無生智者、觀鏡圓四、言觀鏡一者、一法界也、圓四者、理境智也、觀即是智、圓四是境、背即無明、面即智明、鏡十界因、形十界緣、像十境界、又鏡明性十界、像生修十界故形像修性、皆具十界、並不出於法性理鏡、見明形像、修性本如、鏡内外一、離於三教、分別情想、總以不二、無分別智、依理通泯、心境明闇、但緣諸法實相、法性佛法、若色若香、無非實相、以法性實相、即是三諦三觀、一切佛法之大都、若泯若照、無非法性、法性之體、離泯照故、全泯照是(文句三)

なるものである。(この境智すなはちノエマ・ノエシスの論理はしだいに論明するであらう)こゝにおいてか、かゝる法性の自覺的限定の極限到達あるひは極限超越たる佛果菩提に至つては、まづ第一に鐵の連鎖たる時間のカテゴリを一擧にして超躍する、而してそこに時空無限なる法界の實相を歴々として把握するに至る。さらに換言するならば佛陀の統覺的認識の Quid Juris 眞理根據は、まさしく一大無作本有なる眞如法性にあり。その眞如佛性の理本覺としての、予のいはゆる覺自體としての、就中そのノエシス面たる能覺性の、第一義空なる超時間的永遠の常寂照面にあり、常寂常照の明・法性・佛性・如理智・實智なる先驗的意識・先驗的自覺・先驗的統覺力、いはゆる虚空佛性・如來藏・中實理心の、極果における全顯現にあり、その佛果としての事成の極限にあり、眞如理心の事化の極たる佛心そのものの、如虚空無碍なる超時空性にあり。かくの如きものを實に非有非無・中道・第一義諦・微妙寂照(玄八)と稱するのである。かくしてこゝにまづ時間範疇を超越しかつ包容したる「古今一雙」が成立する。

一次元の軸上においては時は跡方もなく消えゆくも、二次元上においては時は常に現在でなければならぬ。この意味において佛果は佛限大の平面ともいふべきものである。しかしもちろんその始と終とは決して結びつくことがない。

もし結びつくならば時は全く時にあらずして空間となる外はない。しかし現實の吾々の不斷の意識も、その深き奥底においては、いつでもかくの如き超時間的「永遠の今」に直接してゐるのである。ゆゑに佛果菩提といふも實に吾々が今現に直接し今現に立脚せる、この永遠の自覺面において成し遂げられるのである。すなはち我れの個性にしてしかも普遍法界性なる、佛性即覺自體の能覺性のノエシス面において成し遂げられるのである。しかしそこにおいては亦自在に時の跡方・歴史の影（否、この歴史の時の創造による無限の向上なくしては、今日の自己自身を成さしめ得ざりし、その時の跡方・歴史の影）を、自在に超越し自在に包容し自在に出入融通するに至るのである。かくの如き意味において成立つところの古今一雙と、これに對し、すなはち歴史に對する社會性ともいふべき（もちろん歴史と社會とは相離れず、つねに相攝するものであるが）すなはち時間に對して空間的差別をもたらしむるところの、社會的多元的なる十界無限の個々人格の多様な *Wechselwirkung* としての行爲的限定をも、すなはち空間的鐵壁をも自在に超越し融通するところの、したがつてかのカントの物自體の祕庫を開いて、神の *intuitiver Vorstand* 直觀的悟性を體驗するともいふべき、現實直觀 *wirkliche Anschauung* としての、「自他一雙」が成立つ。

而してこれは一般論であつて、換言すれば、佛陀の統覺とは、「隨緣眞如を自己の内に見るもの」と予は名くるのであるが、かゝる一般論を特殊のすなはち價值的實在の領域において見るとき、それはまさしく個佛有始の始覺に即して本佛無始の事本覺を統覺するところの「有始と無始とのアンチノミイの統一」となるのである。しかしそれをさらに一層根本的に、その *Quid Juris* (カントのいはゆる認識論的・先驗根據) を尋ねるならば、それはまさしく、無作本有なる理の眞如を盡すことによりて、無始本有なる事の實相を極め、とくに事の本佛を極める、すなはちこれを覺り、顯し、如同し、體現するに至るのであるから、これを「無作を盡して無始を顯す」といふのであり、すなはち有始とはまさに無作を盡すことに外ならないのであつて、こゝに眞如法性の理格あるひは法格と、本佛極果の人格あるひは佛格とが、全く融通合一するに至るのであるから、これを「人法一雙」と名け、さらに第十に、この法と佛との關係を一層具體的に規定して、個佛すなはち法身證得の證法身としてのすなはち報身としての有始今有の自己人格と、本佛すなはち無始本有の三身即一、就中、その中においても報身應身一身の常住をとり、さらにこの中においても毎自の一念・大悲やまさる應身常住をとり、かくて本佛とは應身常住を正面とし、したがつてこの應身常住の本佛とは、

すなはち佛界全體の無始以來の統覺的統一者であつて、新成妙覺の有始の個佛報身（我れそのもの）にとつては他者なるものであるが、しかもこの他者・他人格なる本佛を全く自己人格に包攝して、こゝに始めて成佛開覺といふことの意義を全うし、すなはち無始本佛の無始本覺と本願といふ無始の本果妙を我れに證得し、體現して、「成佛即成本佛」し、眞の正しき始本不二を成就するに至るのである。而して嚴密にはこの始本不二の本といふに、無作本有の眞如の理本覺と、無始本有の本佛の事本覺との二面が存するのである。今もカントの認識論用語を、廣く一般的に隨義轉用して開顯的にいふならば、*Quid Juris* 根據としての眞如の本と、*Quid Facti* 事實としての本佛の本との、理事二面の極が含まれてゐるのである。かくて修成報身の我れといふ個佛人格に本佛といふ佛界全體を包攝し同化し統一し、*and the reverse the case* 以てこゝにかの一般論的なる自他一雙を價值的實在論上において完結して、眞の個全統一としての「報應一雙」といふ始本圓融を成立するに至るのである。

第九の有始と無始あるひは無作と無始との統一としての人法一雙は、もちろんこれも本佛を論じ、本佛に關係づけられるのではあるが、これは主として自己自身の歴史性を融通し、佛果における超時間的報智たるいはゆる第一義空の妙慧のうちに全時間體系を包攝し、したがつて本佛をも自己に包攝して、實相論的であり、第十の法應一雙あるひは報應一雙は、自己の社會性を「佛果」において、したがつてすなはち「佛界」において、さらに即ち佛界の三世間において、如是本末究竟等として平等自在に融通するものであつて、しかもその歸結はむしろ有始の始覺の個佛をも無始の事本覺の本佛に融入せしめ、同化せしめ、包攝せしめ、自己もまた本佛構成の一要員として、したがつて本佛とは新成妙覺の自己を今や新たに加へてしかも依然として無始以來の一大絕對統一的本佛として、しかもその應身常住として實在し活動する、といふことを主として見るものであるから、これは緣起論的である。

予はこの常恒の智願・圓慈の淨用の不斷なる本佛の應身常住を、その報智面における第一義空といふに對して「第一義應」と名ける。すなはち本佛の本感應妙のことに外ならない、それを以て實相の第一義・緣起の第一義・法界の第一義・生佛二者の間における第一義と考へるのである。而して佛陀の智性については、その超時間性 *überzeitlichkeit* が時間性 *Zeitlichkeit* を包むといふことを圖式的に表して、これを *üZ(N)* あるひは *ZüZ* とし、これに對し、無始無終の全時間體系にわたつて救済的活動者としての本佛應身が、有始の開覺としての部分的時間たる個佛を包攝する、

すなはち全時間 Allzeit が分時間 Teilzeit を含むといふことを、AZ (TZ) または TZ AZ として表すのである。而して以上の古今一雙より報應一雙への四者は、佛果極證門における一般的・價值的、すなはち隨緣眞如に對する「一般統覺」と、純粹佛界のみの間における「特殊統覺」との、二面四双であるのである。

元來、眞如の原型、すなはち佛性の先驗的統覺力として、佛陀開覺の根據 Quid Juris が Z \bar{u} Z なのであり、佛陀はそれを顯現したものである。すなはちいはゆる如來藏・中實理心を極果における事心・佛心・果心として顯現したものであるが、しかし個佛は畢竟有始にして時の線分 segment たるを免れぬ。すなはち分時間 TZ たるを出でない、ひとり本佛といふ實在のみは全時間 AZ たり得、而してその智性については AZ \bar{u} Z たり、その慈悲活動については、 \bar{u} Z AZ あるひは AN (AZ) たり。否後者の圖式を一級化して、佛界全體たる本佛においても、ないし全法界たる十界全體においても事體理徳といふ N (AZ) の論理が、否、事實 Quid Facti が成立するのである。しかし眞に總てこれらの關係を徹視徹見してゐるものは、たゞ本佛のみである。ゆゑに本佛を嚴密に表すならば AN (AZ) ともなり、又その智性の統一性を高調するならば、 \bar{u} Z (AZ) または同じ意味を AZ \bar{u} Z として表すのである。しかし歸結は AZ の面すなはち應身常住の面をとるのである。これ壽量品の壽量といひ毎自といひ以何といふ所以である。超時間 \bar{u} Z と分時間 TZ と全時間 AZ との關係もまたしだいに精述するであらう。

以上の如き、「體性・色心・善惡・修性・能所・權實・古今・自他・人法・報應」といふ十双を、予は「十双圓融體系」と名ける。これはまづ妙樂の十不二門と通するものである。何となれば、不二とは實相の異名のみ、中道の異名のみ、圓融の異名のみ。その論理如何。云く、すでに二者の對立があれば、必ずそこに二者をして成立せしめ且つしたがつてこれを統一してゐるところの、普遍共通の圓融原理がなければならぬ。それはいはゆる天台が本迹雖、殊不思議一也と論じて、つねに自家教觀の根本的立脚地としたる、法性實相の一理である。十双悉くこの Quid Juris 眞如根據によつて立つ。しかし後の四双、特に第十は、著しく佛果における Quid Facti すなはち價値と實在との統一たる人格實在としての事實上の圓融たる意味が強い。それは吾々の實踐むしるあるひは佛陀の行爲としての救済論的方向と統覺すなはち佛陀の智性としての認識論的方向との二面にわたつて、天台・日蓮二傑の教智、その宇宙觀その佛陀觀その人身觀に對する、碩異の歧路であるのである。天台は何故に法華の經體すなはち妙法の法體すなはち宇宙の實體

をつひに空と見たるか、日蓮は何故に大圓慈觀と見、活動的大宇宙となしたるか、詳細はすべてしだいに論明し展開しよう。又つぎに予の十双圓融論は、天台の十双權實とも相通する、また本迹二門の各十妙論や、とくに用玄義中に論ぜる十重顯一・十重顯本論とも相通する。しかし彼等にはすべて、最後究極の圓融がない、すなはち眞の本佛實在がない、眞に佛教最後の大教義たる本佛實在といふ事實 Quid facti も根據 Quid Juris もない。

すべて吾々の知識とは圓融を求めてゆくものである、すなはち普遍を求めてゆくものである。すなはち常に自己の背後の體系を求め、背後の統一を求めてゆくものである。換言すればすべて特殊なるものを、普遍一般的なるものに包攝してゆくものである。コヘンのいはゆる Prinzip des Ursprungs 根源の原理を求めてゆくものであり、アリストテレスのいふ如く「知識とはもの始源を知る」ことである。特殊より普遍に、限定より融通に、限界より超越に、すなはち he-dingen, he-ganzon としての物的より über-dingen, über-ganzon としての心的に向ふところのものが、自覺の發展であり、實在の動向であり、生命の要求であり、人格のまた文化のまた歴史の理念であり目的であり、したがつてそれが即ち善であるのである。天台が法華玄義の境妙中に、とくに高論卓説して古今を吞吐し縱横に評破したる、七種二勝論は、當時の時代教學における問題を問題としたるだけに、思想雄渾、とくに鮮かにこの知識圓融性への發展の意義と過程とを看取することができる。現代において知識客觀性の發展といひ、それが文化の方向であり、意志の方向であり、そこに眞理への意志、生への意志、とくに文化的生への意志、といふことがいはゆる同様の意味である。實在の本質、生命の要求を満たすこと大なれば大なるだけ善であり、小なれば小なるだけ悪である。こゝに無明といひ不覺といふに對する法性といひ自覺といひ、予の佛性の向覺・行善といふ意味が現れてくるのである。それは人格融通への道でもあり、こゝに止觀の十乘觀法があらはれてくる。予の十双圓融論はまたこの十乘觀法にも通するものである。而してその根源といひ始源といふに、無作と無始と本體的實在と現象的價値との二面がある。しかし天台においても無始の價値完成的人格實在たる本佛はつひに顯れず、現代哲學においてもまたそれは説かれてゐない。天台の本佛といふは塵點久遠杳として知るべからず、因第三久遠之實修・果第三久遠之實證(玄一上)といひへ、つひに個佛にとゞまる。すでに個佛たる限り、畢竟有始たるを免れぬ。それが因果得道論の正統である。もし之に反し、直ちに無始をとらんとすれば、唯理眞如の無作の且つ無形のいはゆる法性神か、はたまた即事而眞の

有相の森羅萬象神か、いづれにせよこれら總ての混淆が、佛教史上の、また日本思想史上の、とくに日本神道史にさへ大影響を與へたる、否、今なほ現に與へるところの、混沌たる苦悶の足跡なのであつて、眞正なる本佛の實在と構造は容易に發見せられず、つひに佛教統一の法將たる、はたまた國體光顯の國師たる、本化の聖者日蓮聖人に至つて、始めてこの最後の圓融思想が出現したのである。

而して本佛においてはとくに中道としての二面統一的なる、すなはち双非双照的なる構造が、鮮かに現れてゐる。予はこれを「本佛實在の中道の構造」あるひは性格と名けてゐるのである。天台は理の法性實相について大いに中道三諦の妙觀を力説した、彼の教學は實に中道の教學である。而してそれはさきにもいつた如く根本佛教における師主如來釋尊の根本的立場である。天台はその龍樹を通しての大發揚者である。而して今予は天台教學を發展して、その完結體系としての本有哲學を樹立し、その本有概念なるものを展開しゆくと共にそこにおのづから現れきたるところのものとして、か天台的な法性に根據し法性を攝取したる上においての、事の實相としての、しかも特にその極果門における事的實相としての、すなはち價值完成的なる、あまつさへしかも無始完了的實在としての、大人格的本佛そのものについて、その中道性すなはちその圓融性すなはちその統一性を、縱横無盡に解剖しまた綜合せんとするのである。而してこゝに十双圓融體系がまづ出現し、また曾て述べた如き、一門二門三門四門ないし十門等にわたる種々なる組織において見らるゝところの、佛教の哲學體系が成立しあるひは展開し、又これによつて、内は古來佛教史上の難問として島地大等氏が指摘しながら無解決に終りしところの、佛陀論の諸問題等を徹底解決し、外は *Nominalismus* 名目論と *Substantialismus* 實體論、あるひは汎神と萬有神と萬有在神と唯一神と統一神等の、宗教形而上學上の諸問題を解決することができるのである。

かつ天台においては一往、久遠の事佛を立て、否天台こそ佛教史上始めて大いに發達顯本の三如來を論じ、以て悠久無限なる時間上、すなはち事そのものの上に本述を論じて、こゝにすなはち久本近述としたのであるが、しかしその本とは進んでは最初爲本といふ有始にとゞまり、退いては新成妙覺顯本論の如き、論理すこぶる窮窮して延促劫智の苦解に陥り、かつしかのみならず本述古今を融通せんとして、本門十妙の一々の歸結を、本述雖殊不思議一也といふ、法性の一理におき、述門より本門への轉回點に立てる、すなはち述門の法性より本門の佛陀への推移發展を論ず

る六重本述論において、順逆二様に本述の概念あるひは範疇を考察したる後、つひに最後の歸結を法性の理におき、理絶三本述・古今・權實・自他といふも、しかも事に比ぶるときは、またつひに理本本述として、無作の非人格的なる超時間性と人格的あるひは人格化的なる時間性とを對立せしめ、とくにその理本に對しては事述なる述のうちにおいてもまた本佛といふその本佛の實體とは眞に嚴密なる本佛にあらず、たゞ久遠最初といふ意味においての最初根本の個佛有始なる有限的時間性 *IZ* を脱せざるがゆゑに、こゝにおいては到底超時間的なる眞如に及ばず、すなはちこの意味においては、予のいはゆる「事分」は「理全」に及ばずして、つひに佛陀よりもなほ法性を以て最後第一義なりとする法性至上論となり、眞知絶對論となり、法身爲本論となり、實相無相論となり中道無諦論となつて折角本門に對する卓越せる苦心の發揮も、つひに彼れが一たび斥けし兩前權述通同の思想と相去る遠からざるに終つた。

彼は理圓のみならず風に事圓といふ概念と用語をもこれを用ゐながら、その事圓はつひに圓融にあらず不融・未融・隔歴・分裂にして、眞の法界の實相觀を全うせず、まさに因果論上よりも認識論上よりも實在論上よりもつひに去塵昨食の斷案を免れざる本無今有といふ致命傷にたはれ、以後の佛教史をしてうたゞ茫漠たる暗中に摸索彷徨せしむるに至つたのである。かくて長夜の迷夢はつひに日蓮大士に至つて始めて、豁然として一舉に覺まされ、すなはちこゝに眞正なる事圓の本佛に達して、古今を通ずる佛教史の懸案を解決し、さらに最後の一步を進めて、この大いなる超絶的尊嚴の本佛をつひに我が己心の一念に攝し、かくてこゝに一念三千を眞の法界本有の實相として客觀的に完結するのみならず、すべて苟くも實在なるものの歸結と出發點とを、したがつてまたその始中終を一貫する永遠の安住地を、實に我れそのもの自己そのものの神祕なる内面の世界に發見するに至つたのである。法界の本尊を拉しきたつて我れに述語し、實在の本佛をとりきたつて直ちに自己そのものの *Praktik* 述語とする。遍在にしてかつ全智にして全能なる絕對者は眞に己心に本有はたまた己心の本有なることを、健實にして嚴密なる論理の基礎に立つて、認識し體驗し直觀するに至つたのである。これを實に「觀心本尊」と稱するのである。

かくて天台止觀の十乘觀法も、今や單に法性々具の十乘觀法にとゞまらずして、全く無始法界の源頭より本佛實在の靈光を仰ぎ、しかもそれを己心の深き内奥に仰ぎ、一念の信仰を以てこれと直接しこれと合體しこれと感應道交して、佛道實踐の第一歩とする——したがつて天台においても、一面には

當知止觀、諸佛之師、以三法當之故、諸佛亦常、我樂淨等、亦復如是(止一)

といふ法性至上主義なると同時に、むしろ一層深い宗教的意識と實踐修道の内奥においては、

問、行者自發心、他教發心、答、自・他・共・離、皆不可、但是感應道交、而論發心二耳、如、子墮水火、父母
 憂救之、淨名云、其子得病、父母亦病、大經云、父母於三病子、心則偏重、動法性山、入三生死海、故有三病
 行、嬰兒行、是名、感應發心也(止一)

といふ蔽郁たる信仰の香氣高きものある、その止觀本來の要諦 Paulus たり、否、一般に宗教本來の要請たるこ
 ろのものを、こゝに全く満たし得て、よつて以て眞の宗教實踐は、常に毎に「觀心本尊の十乘觀法」なるところに存
 するものなることを、確立するに至つたのである。

かの危機神學、否、基督教、否、宗教一般、否、哲學一般の、つねに問題とし對象とするところの Geschichte und
 Endgeschichte、歴史と終歴史あるひは超歴史、また Zeit und Ewigkeit 時と永遠、また Diesseltis und Jenseits 此
 岸と彼岸、現世と來世、等は、悉く我が一念の己心の神祕なる内奥に外ならないことをこゝに立證したのである。わ
 が己心一念の信仰の終極においてこそ、まさしくこの己心そのものの中において、ブルンナーのいはゆる——(されど
 彼等が思ひも及ばざる、わが大己心界の神祕なる法廷に) Getraut haben diese Wahrheit この信仰の眞理が、すなは
 ち大覺成道の眞理が、いはゆる信念成佛の眞理が、しかも成佛即成本佛なる大眞理が、妥當し實現するに至るのであ
 る。これこそニイチエのいはゆる Fröhliche Wissenschaft 悦ばしき智慧・歡喜の學なるものであり、フイヒテの
 いはゆる Anweisung zum seligen Leben 淨福生活への指南であるべきものであり、カントの願ひし最高善・至上善
 の實現の道なのであり、然りまさに「己心本尊の第一責」でなければならぬ。こゝに子の本有體系の哲學は、最後の
 魂鏡を賦與せらるゝに至つたのである。

Religion ist Selbstlösung, ihre vorborgene Wahrheit ist ihr Gericht. (Brunner : Erlösung, Erkenntnis
 und Glaube) 宗教は自己自身の救済である。その隠れたる眞理はその法廷である。(體驗、認識および信仰)

しかしそれは無限なる神祕の vorborgene Wahrheit 隠れたる眞理あるひは隠されたる眞理であると共に、また最も
 offene Wahrheit 顯はなる眞理であり、公明なる眞理であらねばならぬ。ケルケゴールのいはゆる der Ritter der

vorborgenen Innerlichkeit 隠れたる内面性の騎士の道であると同時に、また實に der Ritter der sich offenbaren
 Innerlichkeit 自己みづからを顯はにする内面性の騎士の道である。かの普通のロゴスを重んじてつひに個性をこゝに
 没入せしめ、たゞロゴスの動きをのみ見るに至つたヘーゲル——その Begrifflichkeit 概念詩——も、はたまた個
 性を愛し、自己の深き魂の問題に沈潜して、眞に神を求めざりながらシエリンドヤやヘーゲルのいはゆる體系としての
 眞理を囀り、みづから ein Bigehen Wahrheit 一片の眞理、を語るにとどめてしかもその魂は entwolter oder 彼れか
 然らずんば此れかの兩極に、すなはち睿智界と感性界との兩極に、佛性と煩惱の兩極に、神性と罪惡の兩極に、つね
 に深い魂の分裂と苦悶を感じて、「吾々は毎に神の前に Unrecht haben 惡をなすものである」と嘆じたケルケゴール
 も、かの普通論者もこの個性論者も、これらは凡て、一個の「觀心本尊」といふ、眞に個全一雙としての普通なる絶
 對と偉大なる己心との統一・融合・抱擁・調和のうちに、解放せられ舉揚せられ救済せられるを見るのである。

ヘーゲルの辨證法的悲劇は、たしかに人間歴史における貴相の深い一面であるが、しかし吾々は彼の Paulogianu
 汎論理主義的なるロゴス論に従ふこと能はざるのみならず、彼のこの悲劇も原則として「觀心本尊」といふ偉大なる
 論理のうちに、彼のいはゆる Schicksal 運命との Angleichung 和解を見、否むしろ、今や Schicksal 運命は Sol
 idarius 賜となり、恩寵となつて、この恩寵との和解を見るに至る。本尊は實に Heiliger 恩寵施與者である。單に
 カント的なるしかも人間たるにとどまるところの Geschöber der Natur 自然の律法者であるのみでない、本佛は
 Gratia irrevocabilis 不可抗なる恩寵の施與者であり回向者である、しかしその恩寵は極めて negativ 否定的なる形に
 おいて現れることもあることを知らねばならぬ。またかのケルケゴールの魂の惱苦も、「觀心本尊」而して觀は即信・
 信は即觀なる、その感應の一瞬に——彼のいはゆる der Augenblick 瞬間、永遠は瞬間の窓より入りきたるその瞬
 間、しかも我が己心の内において鮮かにかつ神祕に深く體驗せられる瞬間、佛性といふ我が人格の靈性の自覺的自由な
 る深き内面の世界に入つて、そこに靈性の確信として把握せられる本佛感應の瞬間において——そこにおいてははもはや
 entwolter odor あれかこれかではなくして、又もとより weder noch あれでもなくこれでもなきものではなくして、
 實に我が靈も肉も、否我れも絶對者も、全く相照相光の發火點に達し、時の世界を超え出でたる永遠の世界における
 Geschehen 出來事の瞬間として、絶えず色心一如の燃焼力となり、靈肉相融の sublimation 昇華作用となり、かくし

てさきにもいつた如き、大いなる生命の目的すなはち「善」——一切の遊離を許さず、抽象化の生活を許さず、善は實在の最も具體的なる統一であるところの、その善の實現、プラトニーのいはゆる善はイデアの最高統一であり、萬物の目的であるところのその善——予のいはゆる佛性の向覺・行善に向つて進んでゆくに至るのである。而してそこには常に本佛圓慈の感應の淨用が働き來たるのである。而して念佛門にはゆる約心觀佛といふ如き思想も、こゝに全く開顯せられるを知るのである。

かくして思惟における geschloßenes System 完結體系を確立したる後に、あるひは確立しつゝ、同時に、實踐における無限なる offenes System 開展體系といふ一大現實、否、一大可能の現實化が、萬人の前に毎に宿題として殘されてゐるのである。すなはち觀心本尊の感應的體驗こそ、吾々の「生における不斷の課題」として、したがつて不斷の出發點として、また道程として、否またさらに永遠の到達地として、吾々の前に大いなる Anspruch 呼びかけをなしてゐるのである、その Ansprechen 呼びかけに答へる Vorsprechen し Verantworten するところこそ、眞に歴史の意義が存するのである。

Was soll ich sagen ? Ach, Mein Mund

Ich danke Weinholt nie ganz kund.

Wie groß, o Gott, ist doch dein Reich !

Wor kommt an Lieb und Macht dir gleich ? (Bronnen)

十一、本有體系の教系と根據

この意味においては實に、十双圓融の最後の完結プラス開展體系として、心境一又あるひはむしろ「心佛一又」を打ち立てねばならぬ。それはまことに、天台の摩訶止觀の法行なる、十境十乘の觀心法門の第一、觀不思議境における一念三千は、たゞに天台の如き法性を對象とし法性を直觀し法性に反省するところの、唯信三心但是法性すなはち唯觀三心但是法性、または但信三法性、理慧相應といふものにのみとゞまるべきではなくして（止一、五）その觀不思議境の境そのものの中心は、實に本佛であり、本尊であり、觀はすなはち信法二行統一の信行となり、信智一如の

妙信となり、また慈信一體の大信、生佛感應の妙行となり、さきにもいつた如く觀心本尊の十乘觀法となるに至るのである。心契三中境、通至三實相（文三）その中境は單に法性の理境たるのみならずして、本佛の中道の事境たるべく、またその實相は眞如理體の實相にとゞまらずして、本佛極東の事常の實相でなければならぬ。天台の摩訶止觀は、百尺竿頭一步を進めて、必然に觀心本尊の教義と信仰といふ、大實在觀プラス大實踐門とならざるを得ない。止觀體系は感應體系に發展せざるべからず。かくして實在體系における眞のノエマは本尊であり、眞のノエシスは信仰であらねばならぬ。單に超個人的なる普遍根柢としての、先驗原理たりまた根本實在たる無作・理全の眞如法性に對する信のみではなく、さらに實に無始絶對の完全實在たる大統一的な人格としての事全・本佛に對する信仰であらねばならぬ。そこにこそ宗教本來の意味における眞の信仰が存するのである。現代哲學もまた今なほ、單に法性眞如に對する信を論ずるのみであつて、たえて本佛を知らぬ。しかし天台はすでに止觀においても感應の發心を要請してゐる。而して天台ないし佛敎の根本立脚地たる眞如の覺自體と、その最高統歸たる本佛の佛自體と、吾々人間の自覺としての認識と、それらのノエシス・ノエマの關係は極めて複雑なるものである。それは嚴密に解剖しかつ統一せられねばならぬ。實在の秘密、理論と實踐の最奥の秘密、その Quoting vote は實に唯一の「本佛實在」に存するのである。そもく本佛とは何ぞや。しかし今少しくこの本佛に到達するについて、その Quid Juris 根據たる予の本有概念における眞理の根柢を検討せなければならぬ。（つゞく）

南無妙法蓮華經

昭和十七年仲呂十三、恩師の示寂に因むの日、太平洋の怒濤澎湃たる 本化の法將の弘教・法難の靈蹟に記す。

教歌

長松清風

おのが身を君にまかすを忠といひ 法にまかすを信といふなり
妙法の光りの外に月も日も 人の心の闇はてらす
尊像をいきていますと思はねば 信心するも無益なりけり
信心のつよき時には煩惱が まけて菩提の眷屬となる
きはまりて悲しき時にあらざれば まことの信はおこらざりけり
まかせたら安心せねばかひもなし 人にはあらずまして佛に
信心を干とせの友とよろこぶを 自受法樂と申すなりけり
法華經をまことと思ひ信じなば その日よりして佛子なりけり
夜もひるもお守りあるを疑ふな われら凡夫の目には見へねど
信心のためいとなめ營みの ために信心すればしくじる
子孫には信心のこせ金ためて 地獄におとすやうなことすな
佛法も當世風の修行あり 妙法五字は時國相應
妙法を唱へだにせば大恩を おくるになると聞ぞうれしき
さかさまにも物を見る故よき事を わろしと思ふ人あはれなり
はてしなき天つみ空を仰ぎ見て 佛のひろきめぐみをぞしる

記事

本部 團報

御降誕會 誰んで佛傳を按ずるに、聖母摩耶夫人が、嵐野尼園中波羅叉の垂れた枝を執られ、仰いで虚空を觀られた時、二萬諸天の玉女が白すのに、「夫人の今生まんみ子は、能く生死の輪を斷ち、上下天人の師として決定して二有るなし、後は是れ諸天の胎、能く衆生の苦を抜く、夫人よ徳を離するなかれ、我等共に扶持せん」と。是の時夫人は波羅叉の樹枝を執り訖つて即ち聖子を生まれましたのであつた。其處には種々の瑞相があつたらしいが、特に世間に贈與されてゐることは、聖子のお生れになると誰人も扶持することなくして四方に七步づゝ歩まれ八方を視られつゝ、少しも瞬かないで口に正言されたのはかの「三界皆苦 我當安之」であつた。即ち釋尊の初轉法輪から、最後入涅槃までの數十年は「度世の要道」を示教されたのである。法華には「如來の法は不可思議微妙の功徳を具足し、成就したま

へり、教戒の所行安穩快善なり」とあるを拜し有難く感ずる。寔に聖子の御降誕は大に慶讃すべきであらう。

五日第一日曜日午後二時、御寶前に盛られた美しい色とりどりの花壇の中央に奉安された誕生佛像を拜しつゝ、一同恭しく法味を捧げて後、大東亞共榮と釋尊の題下に磯部理事の講演及び大聖御降誕の眞意を和賀師の廣長舌により滿堂感涙に充された。大聖の明教が輕視されたり、誤解の多いことは理想文化建設上極めて遺憾に思ふ。志士仁人の猛省を冀つて止まぬものである。

大聖奉戴記念日 八日、第四回の記念日を迎へ、それが大聖御降誕當日であることも因縁の深重を想ふ。午前六時本部に於て完勝祈願の動修後、興亞と人格論を磯部理事より敷衍された。「人格は最後の勝利なり」と哲人のいつたことは何日の時代でも眞言であるまいか、そして人格完成は宗教信仰と道徳修業に據るべきであらうが、再往は三寶歸依が一切善根の元であると碩徳は示されてゐる。畢竟日常眞心の清い整つた働きをいふのである。かかる機會に私共

は痛烈な感激を興へられる。

勝覺經講讀 毎週土曜日午後本部に於て小林一郎先生の講座が開かれて居る。時節柄當面の問題にのみ熱中して古聖の明教を疎んずる風潮が一部に見えるが、これは數ぶべきことであるまい。教化に於ては當面の教化と永遠の教化を考慮してかからねばならぬ。多數必ずしも善といふことは云へまい。國民が皆時代迎合的に善惡を辨へないで雷同する時、其國家は前途危いことを思ふ。殊に今は靜かに遠慮大計を劃せる樞軸のものがあらねばならぬ。勿論これは決して國策に進行するものでなく、否大に高度國防の上から極めて重要である。

勝覺經は千四百年前、聖德太子の擇らばれた三經中の一つであるだけに、我國民の受持すべき明教であり、特に此際識者の精覽すべき聖典と信する、小林先生が從來各方面に於て講讀せられ、先頃から本部で開講さるるに到つたことは等しく祝福すべきであり、此の機會に各位は障障を排除して精進さるべきであらう。朝に道を聞いて夕に死するも可なり」と古聖は述べられてゐる

る。無常遷滅の五體ばかりを愛護して、最も大切な不滅常住の魂を、見えないからと粗略に打捨てて顧みぬことは實に愚の極である。天下は愚に滅ぶと偉人は叫んでゐる。寔に愚鈍と小才は恐るべく警戒すべき輩で、之を支部に見るも、印度に見るも吾人は反省せねばならぬ。日蓮門下は宜しく知法思國の精神に燃え、身命財を捨てて御奉公に勵むべきであるまいか。

決算報告 昭和十六年度事業會計報告並に本年度の豫算と行事の協定を、去る十九日本部御費前に於て、規定の總會に諮つた。事業報告はその都度發表してある故、爰に收支計算を摘記して團員各位の御清覧に供し、併せて益々異體同心となつて令法久住の爲に御高援を企願する。

昭和十六年度收支計算一覽表

(自昭和十六年四月初日 至昭和十七年三月末日)

収入之部
一 金六千八百五拾八圓拾貳錢 總收入
内 譯 維持費寄附金 金壹貳七九〇〇

支 出 之 部
一 金六千〇貳拾參圓八拾六錢也總支出
内 譯
金壹九貳七〇〇 諸印刷製本代
金貳五貳貳、八八 布教並講師費
金貳貳參、九七 通信通話費
金壹壹五、七〇 諸稅賦課金
金壹貳貳、五五 文房諸費
金貳貳貳、六貳 電燈燃料水道費
金參貳〇、貳六 交 通 費
金 八壹、〇〇 速 記 料
金貳〇四、貳七 什器並修理費
金貳八四、六壹 書 籍 費

收支差引勘定

圓費並諸料 一金八百參拾四圓貳拾六錢也
書籍經本料
聽講料
法廷喜納金
理事長助成金
利 息
雜 收 入
前年度越高
三月二十四日 午後になつて突然新見さんが亡くなりましたといふ報を聞いて一同愕然とした。取るものもとりあへず馳けつけてお通夜をする有様だつた。新見さんに私は四五日前にお會ひした計りである。その新見さんが急に亡くなれるとは考へられ
ない。
奥様の御話を伺ふと、新見さんは亡くなるその日迄御散歩なされた。家に歸られて、少し身體の工合が變だとは云はれたが、階下でお茶を飲まれ、お話をされてから二階に昇り、布團の上に横になられ休まれたその儘も知らない間に亡くなられた。奥さんも注意はされたさうであるが、疑られたとばかり考へて別に何とも思はなかつた。それ程安らかに逝かれた新見さんである。
餘りにも唐突なので我々もお通夜の席上で弔辭を認めるといふ始末だつた。明治三

酒悅立正産業報國會記

次年度へ繰越 以上

十七年十一月酒悅商店に勤められてから實に三十九年間、先代親江宜篤氏に仕へ専心同氏を輔佐し、先代歿後も昨秋宿病の爲め辭任さる迄努力された。晩年正信に歸伏されて毎朝仲町の御費前に參詣され皆と共に勤修されてゐたがこの大往生は羨ましい。

三月二十五日 會員一同葬儀に參列す。

葬儀は實に盛大であつた。生花も所狭いまでに幾つも飾られた。故人の人格が今更に偲ばれて床しい思ひがした。棺の上の御寫眞が如何にも明るく、その柔らかな御姿を拜んでると亡くなられた事が何うしても信じられなかつた。午後二時出棺、靈柩車は仲町工場の前で暫時停り、工場のは一同工場の前に參列して最後の別れをした。新見さんに永く訓育を享けた人々は涕泣しないものはなかつた。

三月二十六日 午後六時から酒悅商店全

員で新見さんの家へ行き、磯部先生御導師の下に親しく御勤めをする。お勤めを終へて磯部先生の御法話があつた。人間は何時、どんな事があるかも知れない。

い。諸行は無常である、それに對し我々は充分なる善根功徳を日頃積んでおくやうにしなければいけない。新見さんは羨ましい程立派な御最後だつたさうである。新見さんの死は、その事を我々に教へてゐるもので、油斷するなよ、今日のことは今日なせ少しでもよい事をせよと無言の慈諭を遺されて逝かれた。といふやうなお話でしみじみとしたものであつた。

その後社長が立たれて御挨拶した。ながい間店の爲めに盡された御功績、店をやめられてからの御熱心な信心に就て讓々御話があり、後に發つた人は何んなことがあつても亡き人の意志を繼ぐべきであると其の他にも信仰上の注意や家庭の日常の事についてお話しがあつたが洵に傍で聞いても身につまされるやうなよいお話であつた。新見さんのお家の方には皆泣いて喜んで居られた。

社長の後で、長男に當られる新見一郎さんが起られ、感謝のお言葉を述べ、信仰のことに就いては亡きお父さまの御意志に關ひ度いとの御挨拶があつた。亡くなられた新見さんにも、後に残られ

た御家族にもまた我々にとつても意味の深い、まことによい法要であつた。
三月三十日 月曜日は朝六時より統一團に於て磯部先生御導師の下に一同お勤めをする。終つて優婆塞戒經中、前回の讀として飲酒の弊害と、更に人身は得難く、又正見を得るは難く、復信心を得るは一層難く、善友に遇ふて正法を聞くことは更に難く、受持を得ることは最も難いといふお話であつた。

四月三日 金曜日は仲町御費前にて金曜會あり、磯部先生が御出で下され、お勤めをして下さる。いつものやうに釋尊御一代記を伺ふ。

四月五日 月曜日は釋尊御降誕慶讚會で統一團の御費前御本尊下方の少し左側には澤山の花が盛られ、その花の中に天地を指された眞生佛が莊嚴されて寔に和かであつた。その美しさ、明るさに一同は滿悅の様子であつた。午後二時より盛大な法要があり、磯部先生の「大東亞共榮と釋尊」とい

ふお話があり、空と海を制する者は世界を支配するといふ人があるが、人心をうまく把握出来なければ人々を心服せしめたといへない。人心を降伏せしめないので永遠の平和は望めまい。佛教はその點完備したものであり、佛の慈悲は宏大無邊であり、手近い我々一人の事に就ても、生命の問題、肉體の問題の解決を教へられるのである。佛教は自身の教ひと更に理想文化の建設である。即ち我々は佛を渴仰する心によつて佛性の覺醒と共に人格が向上する。個人が完成されれば社會國家もよくなるといふことは當然であるが、東亞民族の解放の如きも第一に佛教によるべきが正當と思はれる。お互の心が充分に理解出来てこそ其榮も文化構作もある譯である。云々。

和賀先生は「釋尊降誕の眞意」と題して長時間多方面に亘つて御講演下つた。現代人には眞の幸福といふことは分らないといふ事から始まり、それを知るには正しい教へに依らねば不可ない。正しい教へとは佛教の事であり、佛教の中では法華經第一である。佛教は第一に生命の問題に對して、眞の生命の姿を開示した。第二に法

界實在、不滅永遠の靈格を説き明した。第三に、以上二つの感應道交、それによる生活上の生きた喜びを説いてあり、第四に信仰が生活の光、道義の源流となり、文化の建設、世界平和を招來するものであり、釋尊出現の眞意義があると説かれた。

また當時に於ける印度の社會制度、婆羅門の六種の外道論があり、一、無因論の怖るべき點、二、宿命思想の消極的なる點、三、物質思想の誤まれる點、四、機械論の如きが天皇機關説に迄發展する點、五、苦行なる點を遺棄なく論ぜられた。其の外にも佛教と佛敎との比較批評があつて洵に有益なるお話であつた。

四月六日 月曜日は朝六時から統一團で勸修、磯部先生の御法話、優婆塞戒經中、尸羅波羅蜜品の御話があつた。この日、同信達藤啓次郎君が御曼陀羅を拜受、先生に開眼して戴いた。同君の信心も高つては來たが、この上益々強盛ならんことを祈るものである。

四月八日 水曜日は第四回の有難い大詔奉戴日で、朝六時から統一團で磯部先生御導師の下に悉く御勤めを爲す。お勤めの後、磯部先生の御法話が有つた。大略を記せば、今日は第四回の大詔奉戴日であり、釋尊降誕の聖日であるが、以前は日比谷あたりで盛大な花祭りがあつたが、今日はそれもない。現代は多くの識者階級に於て信仰心がない。昔の立派な人、たとへば和氣海蔵公や菅原道真卿でも徳川光圀卿などは熱烈な法華經の信者だつた。今の人は大和魂が何うだとかかうだと叫ぶが、甚だ排他思想が濃厚で佛敎にしても佛敎にしても輕蔑する傾向は全く遺憾なことである。魚は水を離れば死す、人は教を離れば死すとは大箱三略にある文句だ。教を離れた民族の止むるといふことは歴史を見て明らかであらう等。

四月十日 金曜日は仲町にて金曜會。
四月十三日 月曜日は統一團で朝六時から勸修、磯部先生の優婆塞戒經中藥品に就きての御法話があつた。

四月十四日 火曜日は先代本感院妙行日成大姉靈位第五周年の御命日に當るので、仲町御寶前で一同朝七時より勸修した。夜は御命日と兼ねて駒込の宅で同心會員が集つて御回向した。和賀先生には御身體の工合の悪いところ無理にお出で下さる等感激の深いものがあつた。嚴修の俊和賀先生には釋尊降誕と日蓮聖人の開宗宣言の御法話があり、磯部先生には、本多上人の著書にもとづく日蓮主義の御講義も終つたので、

今日から新たに天台大師の「小止觀」を御講義下さる事になつた。同心會は、昭和十一年五月十六日創設され、初め同志會といつたが、六月三日同心會と改まり、それからずつと引續いて月三回例會を開催しつ今日に至つてゐる。その間磯部先生に教を受けてゐるのであるが今「止觀」の初講に當り、懇切なる開講の御挨拶を拜聴して眼の濕むのを禁じ得ない。この先何時迄も先生の御世話に預るこ

とには變りないが、先生にも充分御健康に努められ、先々我々を御指導あらんことを御祈りした次第である。斯うして一々日を擧げて書いてゐると先生に餘りにも御世話になつてゐることがよく分る。和賀先生にも多分に御世話になつてゐるが、最近御身體の工合がお悪いように承つてゐる先生には是非御身體に御留意下さるやうお願ひして筆をおき度い。(金城生)

團費誌料維持費及寄附金領收 (自三月二十一日至四月二十日)

一金五圓也	東京 山田 英二殿	一金貳圓五拾錢也	久留米 平岡 越郎殿
一金貳圓貳拾錢也	名古屋 大八木 義雄殿	一金壹圓也	東京 石井 幸生殿
一金拾圓也	盛岡 中村 謙藏殿	一金四圓四拾錢也	大阪 澤田 萬壽殿
一金貳圓貳拾錢也	富山 石黒 政文殿	一金貳圓五拾錢也	川口 尾形 多喜男殿
一金貳圓五拾錢也	神奈川縣 東端 兼吉殿	一金拾圓也	奈良 村田 よし子殿
一金貳圓貳拾錢也	靜岡縣 支 妙兼殿	一金貳圓五拾錢也	中支 藤城 隆助殿
一金貳圓五拾錢也	東京 古澤 たみ殿	一金拾圓也	東京 森山 太郎殿
一金貳圓五拾錢也	同 竹中 靖夫殿	一金參圓也	同 和賀 謙介殿
一金貳圓五拾錢也	福島 菅野 康太郎殿	一金貳圓五拾錢也	千葉縣 戸村 東陽殿
一金七圓四拾錢也	京城 末永 洋殿	一金壹圓貳拾錢也	名古屋 石上 長作殿
			東京 藤岡 米子殿

一金壹圓貳拾錢也	東京	越山雄四郎
一金貳圓貳拾錢也	岩國	中村明法
一金五圓	東京	内藤健三
一金貳圓五拾錢也	岐阜縣	佐藤良淳
一金貳圓五拾錢也	新潟縣	高橋大吉
一金五圓	明石	穂川福太郎
一金壹圓貳拾錢也	靜岡縣	金原哲雄
一金六圓	東京	松田浩充
一金六圓拾圓也	廣島縣	有田宏道
一金五圓	愛知縣	中村清兵衛
一金壹圓貳拾錢也	名古屋	藤平惣助
一金參圓	千葉縣	出口眞道
一金拾圓	東京	池田長福
一金貳圓四拾錢也	同	徳永順治
一金壹圓八拾錢也	同	北山雅章
一金貳圓貳拾錢也	同	大竹良平
一金貳圓五拾錢也	横濱	貝塚敏二郎
一金六圓八拾錢也	東京	芳村伊四郎
一金貳圓貳拾錢也	宇都宮	中山高二郎
一金貳圓五拾錢也	大阪	吉村麟二
一金貳圓五拾錢也	東京	馬場千之
一金五圓	横濱	中村文吉

四〇

一金貳圓貳拾錢也 青島 岩永一男
 一金貳圓貳拾錢也 同 宮崎 祐之
 一金貳圓貳拾錢也 同 新沼 文次郎
 右雜有入帳仕候也(以是領收證代用)

財團法人統一團會計

貴邊の去三月の御佛事に驚目其數有りしかば、今年一百餘人の人を山中に養ひて十二時の法華經を讀しめ、談義して候ぞ。此等は末代惡世には一團浮提第一の佛事にてこそ候へ、いくそばか過去の聖靈もうれしくをばすらん。釋尊は孝養の人を世尊となづけ給へり、貴邊登に世尊にあらずや。

日蓮聖人曾谷抄

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	馬天覽	同	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	同	金五圓
禪修諸事詳釋	同	同	同
本多日生上人	同	同	同
勸行作法	同	同	同
佛教の心髓	同	同	同
河合彰明著	同	同	同
皇道と日蓮主義	同	同	同

東京小石川區音羽町六ノ七十
 財團法人統一團出版部
 振替東京九四二〇番

統一團 定價一冊 金貳拾錢 送料壹錢
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

○御申込ハ總テ前金ノ事
 ○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
 ○御轉居ノ場合ハ必ず新舊共ニ御通
 知ノ事

昭和十七年四月二十七日印刷納本
 昭和十七年五月一日發行

(第五百六十六號)

發行所 財團統一團
 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番

東京市四谷區内藤町一
 印刷人 山田英二
 東京市小石川區音羽町八ノ十一
 印刷所 野島好文堂印刷所
 電話牛込六九六六番

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町二丁目九番地
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番

統

一

明治三十年十一月二十四日
第三種郵便物認可
第五百六十六號
第一冊發行

第五百六十六號

第四十七年

五月號